

山形県現代俳句協会会報

第 27 号
令和 4 年 12 月

吟行たのしきかな・・・

山形県現代俳句協会会長 大類つとむ

令和四年十一月十八日、久々の県現代俳協吟行は会を山形市もみじ公園にて催した。その名の通りまさに紅葉真つ盛りで、風のない秋光鮮明のいち日であった。コロナ禍の影響もまだまだ続くこともあつて少人数での会であつたが、各自充実したひと時であつたように見受けられた。

この庭は私の大好きな場所でありおりちよつと足を運ぶ名庭であり、以前一度参席したこで行われる「鈍翁大茶会」はそれは見事な茶会であつた。この名庭は実業家であり大茶人と言ふべき益田鈍翁ゆかりの庭である。

唯一、連日欠かさず催されている立礼席がお休みなのが何とも残念であつた。

出句は三句、大勢のもみじ狩りを楽しむ人の中、各自思い思いに庭内に散つた。私個人としては、人影の無い静まり返つた園内よりもこの日のように人の動きがさまざまに見えた方が句材が広がつて良いのだが、結果的に人の動きのない目の前の風景を詠んだ句が多くを占めていたことは意外でもあり面白くもあつた。師の田川飛旅子は吟行は堅くならず取材のつもりで」と言つた。その故か、しつかりと材料を拾つて、心を寄せて、句づくりはその夜に・・・と私は常々考えている。

会議室に肩を並べ、ペットボトルの茶を立てて首を傾げているよりも、やはり仲間たちと同じ空を仰ぎ、同じ道を歩く吟行は得がたいことこの上ない。吟行句会は、柳原極堂や正岡子規が考え出し、虚子によつて今日の基本形が出来上がったものと言ふ。当り前のように行つてゐるが、つくづく見事なものと言つてよい。

趣のある部屋の大窓を広く開け、用意された弁当、そして句会に入つた。それぞれの選やお話に耳を傾けウムウムと頷きあつた。

会員諸氏の話を伺うと、吟行会も句会も大賛成の方が多くようである。これからはもつとつと吟行会を設けてより楽しく出来ればと思ふばかりである。

天童の瀬野史さんの初参加も嬉しいひとつであつたうえ、ご準備して下さつた木嶋さんはじめ各位に心より感謝申し上げます。

現代俳句の秀句を読む 4

盲人の目がおそろしき十二月 畠山弘

昭和四十六年三月七日刊行の「誘蛾灯」の中の一旬である。私は昭和四十九年十二月に、神田の古書店・玉川堂でこの句集を求めた。立正大学在学中で、仏教書を購入の為休暇のすべては各地の古書店漁りをしていたが、小中学校時代には俳句にも興味があつたことから出合えた一冊である。

大正十四年生まれ私の母は隻眼であつた為、突然飛び込んで来た句であつた。季語の「十二月」が重く、自然に頭を垂れた。この句集を一気に店で読み買い求めた。この句に隻眼の母の眼球の鋭さ心の鋭さが宿り、ぴたりと警策に打たれるようにも感じられた。

各地に赴任し、平成十二年に新庄市に赴任した。驚いたことに畠山弘先生が山形新聞の俳句の選者であり、さらに深い縁を感じた。

先生との出会いがなければ、今の私の俳句はないと感じる。
(自鳴鍾 柏崎青波)



県現代俳句協会吟行会

11・18 山形もみじ公園

- 1 散り紅葉池に張り出す臥竜松 瀬野 史
 - 2 華紅葉吉野も斯くや清風荘 //
 - 3 水底に積もる紅葉や鯉ゆらり //
 - 4 紅葉晴仰ぎて座骨軋ませる 柏崎青波
 - 5 紅葉晴人の色香のはなしして //
 - 6 紅葉池朱色秘めたる深さかな //
 - 7 東やの屋根敷きつめる紅葉山 松浦廣江
 - 8 紅葉山シャッター音は控え目ね //
 - 9 秋深みベンチにタオルの二人かな //
 - 10 名庭の紅葉且つ散る池巡り 木嶋玲子
 - 11 走り根の苔むす庭や散紅葉 //
 - 12 薄ら日の池を巡りて秋深し //
 - 13 東屋に集い合う友紅葉燃ゆ 佐竹伸一
 - 14 一本の紅葉の赤黄緑色 //
 - 15 声弾む出会ひ紅葉の庭の道 //
 - 16 黄落の一樹とゆれず頻りなる 大類つとむ
 - 17 寒鯉となる寸前の口集う //
 - 18 七日町二丁目五番地紅葉狩り //
- (太字 特選句)

【特選句作品鑑賞】

1 散り紅葉池に張り出す臥竜松 瀬野 史

庭園に限らず、大抵の樹木は上へと伸びるのが普通であろう。しかし公園の松の木は、池を越え這いつくばって伸びている。水中には数本の支柱が建てられ棕櫚縄が巻かれてまるで大蛇が横たわっているよう。先の枝葉はこんもりとしていて、落ちる枯れ葉を優しく受け止めている。公園は見渡すかぎり紅葉一色、緑を保つ松の姿に心を寄せる。公園の主のようにも思えたのだろうか。

松浦廣江

4 紅葉晴仰ぎて座骨軋ませる 柏崎青波

人が直接詠みこまれない句群の中でひとときわ人の存在の大きい一句である。吟行会の折は、ひと通り辺りを見て廻ったあと、良いところを見つけてじっくりと座って句をつくるようにしている。いつの頃からか立ち上がろうとすると確かに軋む、キシむ、高い処などを見上げたあとは尚更である。紅葉と座骨、面白い関係性であるが、確かさは揺ぎない。

大類つとむ

紺碧の空に貼り込まれた紅葉の数々。首を傾げただけでは紅葉は視界に収まらない。一本のもみじには、真紅や深紅の葉もあれば、その一部分に黄色が混じったものもあり、緑を保ったものまである。腰骨を正し背筋を伸ばすことで、眼前には紅葉の全景が広がっていく。座骨の音は美しさの代償だが、樹下には痛いのも忘れそ

の見事さに見とれている作者がいる。上五中七の間に「切れ」があることで、広がりや臨場感のある一句となった。

佐竹伸一

11 走り根の苔むす庭や散紅葉 木嶋玲子

もみじ公園は古刹の庭園だったものを、江戸時代の庭師が山形城の庭園の余石と、吉野のもみじを配して造った庭という事。秋のもみじの紅葉の美しさは格別で、ついついその美しさに見惚れ上ばかり見て回った。

掲句は走り根に美しく苔むした、庭園の主のようなもみじの姿を見逃さず詠んでいる。このように、焦点のしっかりした句が詠めるよう精進したいものと思う。

瀬野 史

13 東屋に集い合う友紅葉燃ゆ 佐竹伸一

久々に集まった友どち。紅葉の素晴らしさに声も出ない。ここは山形市内でも有数の紅葉の名所「もみじ公園」。中でも大木の吉野もみじが格好良く枝を広げ、緑から赤や橙色に変わる彩りのグラデーションに圧倒される。こんな時間を友達と共有出来たのも幸せだ。

木嶋玲子

【高句句】

五点

散り紅葉池に張り出す臥竜松 瀬野 史

紅葉晴仰ぎて座骨軋ませる 柏崎青波

四点

走り根の苔むす庭や散紅葉 木嶋玲子

東屋に集い合う友紅葉燃ゆ 佐竹伸一

吟行会に参加して

十一月十八日、県現俳協の吟行句会が山形市の紅葉公園で開催されました。

コロナ禍で久々の顔合わせとなり、参加の六名は再会を喜び早速吟行に入りました。一時間程池泉回遊式の庭園を巡り、目の覚めるような紅葉の美しさを堪能しました。

午後は清風荘で庭を眺めながらの句会となり、初参加の私には充実した半日でした。

(瀬野史)



心の文字を配置にした心字池に映る紅葉
自身の心を写してみては。

数年ぶりに山形市もみじ公園の句会に臨んだ。

拙僧は七十三歳で、両膝関節置換手術・虚血性脳血管障害の手術で、句会でも膝や関節がコキコキと鳴る。又眼も廻るが、薬を持参し罪障消滅と自分で自分を励ましての出席。皆さんとの出会いに、心を晴れ晴れとさせてください。特に木嶋様にはお世話になりました。

佐竹さんの

東屋に集い合う友紅葉燃ゆ

久しぶりの開催を喜び合う句友達。燃えるような紅葉と伴って、そして弾んで突き抜ける空が吸い込んでいる。若々しい句に心を入れ替えさせられ、作品に学ばされた。

木嶋さんの

走り根の苔むす庭や散紅葉

重厚で、他人にはあまり視えない所をしつかりと詠んでいる句で感動した。自分の怠慢を教えられた。

一年にひとつずつ加齢するが、当地豪雪の除雪作業の季節。開き直りの精神で、今しか作れない、慰めや癒しの言い得て妙の句をめざしたい。お手伝いのできない拙僧をお許し願いたい。皆様のご自愛を切にお祈り申し上げます。

(柏崎青波)



臥竜松
踏まれても蹴られても…。支えられて生き続ける姿、紅葉に映える緑。↑

頭の中、紅葉でいっぱいになりました。
さあ、落ち着いて投句だよ。
清風荘で句会↓



第五十九回現代俳句全国大会

秀逸

戦争がこんなに見えて冷し瓜

大類つとむ

今年の現代俳句協会全国大会で秀逸をいただいた句である。昔から句会は勿論、ナントカ俳句大会等に入賞する事など殆どない私なのでやや驚いている。もともとこの手の大会もあり好みものではない。

しかし選者のひとりになっている以上形ばかりでも…と出句したひとつである。それにしても近頃の映像による見え過ぎるような情報の氾濫は、遠く離れた戦争の様子を具に私たちの前に提示してくれる。ベトナムや湾岸などの比ではない。何とも不思議で身勝手な所業ではないか。それ等を安易に観ている自分が恥ずかしくさえ思えてくる。日本人のどこかには戦争―暑い夏という思いがいつまでも体内に残っている。そしてそんな中の冷やし瓜も…。そしてこの句、どう見ても私の佳しとするタイプの句ではないのだが…。

事務局から

十一月十八日、山形市東原町の「もみじ公園」を会場に吟行会を行いました。吟行会は平成二十九年に大石田町を会場に行つて以来なので、実に六年ぶりの開催でした。「もみじ公園」は真言宗の巨利宝幢寺の庭園だったものを、山形市が都市公園として整備し開放しています。紅葉の盛りは過ぎておらず、青空と手入れの行き届

いた見事な庭園の木々の彩りの中で、和やかな句会となりました。会場のお手配をくださった木嶋玲子さんに心より感謝申し上げます。

(佐竹伸一)

現代俳句協会の一般社団法人化について

現在手続きが進められております。山形県現代俳句協会に関係のある部分をお知らせします。法人化された後の協会と各地区協との間の覚書

《骨子》 相互に、「協力・提携団体」としての位置付けをする。

1. 現在は、「現代俳句協会規約」により、本部及び各地区は一体化された形での運営がなされているが、今後は別個の団体となる。

2. 所謂本部会員が自動的に地区協会にも所属することは無くなる。

3. 地区独自に所属会員（本部会員）名簿を整備すると共に、地区独自の会員制度に基づく会員の募集も可。（活性化を期待）

4. 現行「地区助成金」の仕組みそのものは大きく変えないものの、今後は、予め本部・地区間にて共有する地区在住本部会員のデータに基づき、地区からの申請によって支払い

を実行するのが原則となる。（自動的かつ一方的な、本部からの振込では無くなる。）資金

拠出に際して、予め助成対象の事業の内訳も必要。

5. 「現代俳句協会」名称の使用、会員名簿・個人情報

の管理などについて、改めて取り決めることも必要。

人情報の管理などについて、改めて取り決めることも必要。

〈編集後記〉

陸紙の主宰であった田川飛旅子の作品に老人の日より始めて仮名習ふ

とある。私は、前期高齢者となり会報の編集を習う事になった。今や、デジタル時代、一人前になるまで何年懸かるか、長い目でのご指導よろしくお願ひします。（松浦廣江）

吟行会の青空はどこに行つたのか。寒い、暗い、陰鬱を絵に描いたような日が続いている。吟行会に参加できなかった私は、会報27号で、参加された方々の作品や感想を読むと一緒に庭園を歩いているような気分になった。この会報を手にするとき、人とのつながりを感じて頂ければいいなと思う。これから勉強会、吟行会などの開催を通して、会員が触れ合う機会が増えればよいと思う。

そして、会報が会員の皆様をつなぐものになるように、いっそう工夫していきたい。（堀尚子）



会報27号 令和四年十二月発行

発行人 大類つとむ

発行所 山形県現代俳句協会

〒九九七 四二二七

尾花沢市中町五一〇

〒九九〇 一五五二

朝日町常盤に五二一一

事務局 佐竹伸一